



Title	唐代藩鎮と東部ユーラシアの歴史的展開
Author(s)	新見, まどか
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51858
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (新見まどか)	
論文題名	唐代藩鎮と東部ユーラシアの歴史的展開
<p>論文内容の要旨</p> <p>本稿では、9世紀の中国、唐王朝に出現した地方軍閥である藩鎮に注目し、その活動を中國内地のみならず、東部ユーラシア史の中に位置づけることを目標とした。序章「唐代藩鎮研究の現状と課題」では、唐代藩鎮を巡る研究史を整理し、その課題と本稿での研究指針を述べた。従来の藩鎮研究は、主として中国史の枠組みに則り、朝廷と藩鎮との関係に注目して考察が行われてきた。しかし実際には、藩鎮が朝廷以外の勢力とも連絡を取ったことが判明しており、対朝廷関係のみを分析しては藩鎮の多面性を理解することができない。さらに、近年の中国史を巡っては、中華世界の動向を、草原世界や海上世界など、東部ユーラシアとの関連の中に位置づけようとする潮流が興っている。そこで本稿では、唐代藩鎮体制の展開と東部ユーラシア情勢との関連を実証的に解明すべく、華北東部に割拠した安史軍系藩鎮を対象に、朝廷のみならず他の藩鎮や遊牧勢力・海上勢力などとの間で展開した遣使・盟約・婚姻などの外交を整理・分析し、その背景や特徴を考察した。</p> <p>第一章 「華北東部における藩鎮「連合体」の成立」では、安史の乱（755～763）直後に安史軍系藩鎮の間で結ばれた婚姻に基づく大規模な「連合体」に注目した。当時、この「連合体」に参加した藩鎮は、成徳・平盧・魏博・永平・相衛・襄陽節度使の合計六鎮にのぼった。このうち、襄陽節度使を除く五鎮は全て、安史軍系藩鎮であった。また「連合体」形成の目的は、藩帥位の世襲、領域など様々な権益を維持し、朝廷に対抗するものであった。そして、婚姻関係の内容やチベット語史料の記述などにより、成徳節度使の李宝臣が、「連合体」の中心人物だったことが判明した。彼が有力となった背景には、当時の華北東部で広く行われた安禄山に対する信仰・崇拜があったと思われる。実は李宝臣は、安史の乱を生き残り、かつ節度使まで昇りつめた、唯一の安禄山の仮子であり、一時は安姓を名乗つたこともあったのである。旧安史軍から成る軍団を統御したい各藩帥にとって、安禄山との擬制的な血縁関係を有する李宝臣と結ぶことは、極めて有利な戦略だったと考えられる。</p> <p>第二章 「徳宗期「建中の反乱」前後の河北に対するウイグルと朝廷の対応」では、李宝臣没後に安史軍系藩鎮が唐朝廷と対峙しながら如何に勢力を維持したのか、特に草原世界の動向を踏まえて考察した。李宝臣が亡くなると、彼の息子の世襲を巡って、朝廷と「連合体」に参加した藩鎮との間で大規模な軍事衝突「建中の反乱」（781～786）が勃発した。その際、成徳・魏博・平盧節度使は、「連合体」には参加していないかった盧龍節度使を誘い、唐朝廷に対抗するために再度連盟を結成した。同時に、モンゴル高原の遊牧帝国であるウイグルに遣使し、軍事援助を請願した。この時ウイグルの南下を後押しした要因の一つとして、本稿では、盧龍節度使とウイグル王女との通婚に注目した。盧龍節度使と結託したウイグルは河北に侵入し、「建中の反乱」の混乱を拡大させたのである。それを受け唐朝廷は乱後、盧龍節度使を除く河北の安史軍系藩鎮との紐帯強化に努め、集中的な公主降嫁を実施した。しかし安史軍系藩鎮と朝廷との婚姻形態は、仮公主の存在や藩鎮側からの女子の入嫁が無い点で、外戚のような国内勢力よりは、外国勢力、特にウイグルに対する降嫁と類似していた。このことから朝廷にとって、河北の安史軍系藩鎮が決して唐皇帝の身辺にまで進出を許される勢力ではなく、あくまで一定の距離感を保つべき存在と認識されていたことが窺える。</p> <p>第三章 「平盧節度使の活動と海商・山地狩猟民」では、徳宗期から憲宗（在位：805～820）期にかけて最も活発な外交を展開した平盧節度使に注目した。「建中の反乱」後、成徳節度使の中心的な立場は失われ、代わって成徳節度使と領域を巡って対立していた平盧節度使が、河北・河南の安史軍系藩鎮と活発な交易や婚姻を行うようになった。さらに平盧節度使は、朝廷の財政的な生命線であった、通済渠への軍事侵攻も図っていた。こうした平盧節度使の対外活動を支えたのは、山岳の広がりや海上世界との結びつきなど、河南特有の地理環境であった。平盧節度使は、軍事的には山地狩猟民であった「山棚」なる集団と、経済的には海上交易に携わった新羅商人などの海商と結託していた。ただし、山棚も海商も、必ずしも平盧節度使のみに帰属意識を持ったわけではなく、季節ごとに移動する機動性の高い集団であった。そこで平盧節度使は、彼らを掌握するために仏教寺院を利用した。山棚・海商双方がいずれも仏教寺院を拠点としたので、平盧節度使もまた寺院や僧侶と接触することで、山棚・海商の軍事力・経済力を効率的に利用することが可能となつたのである。</p>	

第四章「昭義節度使劉稹の乱と唐代藩鎮体制の変容」では、武宗（在位：840~845）期に勃発した藩鎮反乱、昭義節度使劉稹の乱に着目した。劉稹の乱は從来、唐代藩鎮史上の「例外」的な見方が強かった。だが軍団中枢部の分析により、実は当時の劉稹軍が憲宗期に解体された平盧節度使の後継勢力であったことが判明する。すなわち劉稹の乱は、代宗期以来の安史軍系藩鎮による反乱と同じ系譜に位置づけて考察することが可能なのである。

当時の唐朝北辺には、ウイグル帝国崩壊を受けた遺民集団が出現していた。劉稹は、この混乱に乗じて叔父から藩帥位を継承しようと図り、朝廷に昭義節度使の地位を要請した。ところが実は、南走ウイグル本体はすでにほぼ壊滅状態にあった。ゆえに朝廷は北辺防衛の軍事力を対昭義節度使に割けると判断し、劉稹に対し討伐令を出した。その際、朝廷は劉稹と河朔三鎮との連携を断つべく、劉稹に与しなければ藩帥位の世襲を特権的に容認する、という交渉を河朔三鎮に持ちかけ、河朔三鎮はこれを受諾した。この取引は、朝廷にとっては河朔三鎮の軍事的脅威を削げた点で、河朔三鎮にとっては「連合体」結成以来の世襲と領域の保持という目的を達成できた点で、双方に成果があった。ところが河北の安定は、元来河朔三鎮に対する防衛を担ってきた河南を中心に、大規模な軍縮を促すこととなった。その結果、軍団から放出された兵卒は、盜賊・密売商人、そして反乱への加担を行い、河南の情勢不安を導いた。すなわち唐朝が志向し続けた安史軍系藩鎮の弱体化という指針こそが、唐末の混乱を導いたのである。このことは唐代藩鎮体制は武宗期に至って、河北から河南を中心に動搖の兆しを呈し始めたことを意味する。元来、河南藩鎮が担った役割は河北の安史軍系藩鎮に対する防衛であった。しかし朝廷が河朔三鎮との妥協を選択したこと、その前提が失われ、河南の軍事力は行き場を喪失していった。武宗期は、安史の乱を経て構築された藩鎮による地方統御が破綻を来たし、唐朝滅亡へ繋がる諸問題が顕在化した点で、唐代藩鎮史上の画期的と位置づけることができるだろう。

終章「唐代藩鎮体制の展開と東部ユーラシア」では、以上で検討した唐代藩鎮の活動を、東部ユーラシアとの連携の中に位置づけることを試みた。その際注目したいのは、安史軍系藩鎮が活用した勢力が、必ずしも朝廷側の人材・権威ばかりではなかったことである。河北の場合は遊牧民、河南の場合は会昌や山地民といった相違はあるが、安史軍系藩鎮の活動はいずれも、唐朝支配の枠外であった草原世界や海域世界と繋がっていたのである。安史軍系藩鎮の軍事力・経済力は、決して中華世界内部で完結したわけではなく、東部ユーラシアの諸勢力との緊密な連携のうえに維持されていたといえよう。

このような視座に立つと、**第四章**で提示したように唐代藩鎮史の画期を武宗期に見出すことは特別な意味を持つ。序章でも述べたとおり、近年は中華世界の統一・分裂が、東部ユーラシア全体と共に生じていたとの指摘がなされている。とりわけ九世紀半ばの武宗期は、ウイグル帝国の崩壊や海上勢力の抬頭という明白な画期性が見出せる点で、日本史の立場からも注目されてきた。ただし、肝心の唐朝における変動の有無は具体的に説明されておらず、統一・分裂の共時性が偶然なのか否かも、未だほとんど実証的な検討がなされてこなかった。

しかし**第四章**では、劉稹の乱平定を受けて全国規模で藩鎮に対する軍縮が推進されたこと、この軍縮の中で対河朔三鎮用の軍事力は不要と見做され、河南藩鎮から放出された余剰兵力が国内の不穏分子に変貌したことを明らかにした。すなわち九世紀半ばには中華世界内部でも、唐朝の滅亡へと繋がる動搖が生じていたことを確認できたのである。

さらに重要なのは、こうした動搖の遠因として、ウイグル帝国崩壊に伴う北辺情勢の変化を指摘できたことである。劉稹の乱平定に活躍した藩鎮には、特に晋絳行營節度使があつたが、これは北辺における南走ウイグル集団の掃討を受けたものであった。そうだとすれば、唐朝内部の混乱がウイグル帝国の崩壊と前後して表れたのは、決して偶然ではなかったことになる。九世紀後半の唐朝における情勢不安は、ウイグルの崩壊を受けた北辺の緊張緩和、その結果可能となつた劉稹の乱討伐、乱平定の戦略上重要だった河北の安定、そして乱後の軍縮という、段階的な過程を経て生じたものだったのである。すなわち**第四章**の成果は、九世紀半ばの唐朝の動搖が、同時期の東部ユーラシア、とりわけ内陸の草原世界の影響を受けていたことを実証するものである。

そもそも唐朝は創業以来、高句麗や突厥、吐蕃やウイグル、さらには内地の安史軍系藩鎮にまでも警戒し、膨大な兵力を抱え込んできた。ある意味では唐朝は、常に強大な敵対勢力の存在を前提として統合を維持してきたのである。ところが9世紀半ばには、これら唐朝に匹敵する脅威が急激に勢力を失っていった。おそらく唐朝はこのような安寧を経験したことがなかったため、その軍事力を上手に解消できなかつたのではないか。本稿の成果からは、従来的な要因のみで説明されてきた唐朝の衰亡が、外部の軍事的脅威の衰亡と関連していたとの見通しを得ることができる。

このような見通しに立てば、以後の時期の中華世界の歴史展開もまた、東部ユーラシアの動向を踏まえて考察することが必要となる。例えば十世紀、草原世界に絶対的な統一政権が無かつた時代における五代十国王朝の乱立や、契丹の強大化に追随するかのような宋朝による統合は、今後の検討課題となる。「唐宋変革」期の実態は、中華世界のみならず東部ユーラシア世界全体との相互の影響を視野に入れることで、より立体的に解明できるであろう。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　(　新見　まどか　)		
	(職)	氏　名
論文審査担当者	主　查　　大阪大学 教授	荒川 正晴
	副　查　　大阪大学 教授	片山 剛
	副　查　　大阪大学 教授	桃木至朗
	副査　　大阪大学 准教授	田口宏二朗
論文審査の結果の要旨		
以下、本文別紙		

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 唐代藩鎮と東部ユーラシアの歴史的展開

学位申請者 新見 まどか

論文審査担当者

主査 大阪大学教授	荒川 正晴
副査 大阪大学教授	片山 剛
副査 大阪大学教授	桃木 至朗
副査 大阪大学准教授	田口 宏二朗

【論文内容の要旨】

本論文は、唐代後半期における藩鎮の動静が、同時期の東部ユーラシア情勢と如何に関連していたのかを解明しようと試みたものである。とりわけ藩鎮のなかでも、唐朝に投降した安史軍の將軍と軍団を安堵して成立した安史軍系藩鎮を取り上げ、彼らが節度使の地位の世襲や領域保持のため、唐朝廷のみならず、他の藩鎮および内陸世界の遊牧勢力や海域世界の海商などと多様な関係を構築していたことを明らかにしている。

第一章では、安史の乱終息直後、六つの安史軍系藩鎮が、成德節度使李宝臣を中心とする「連合体」を築き、世襲などの特権維持を図っていたことを明らかにする。また、李宝臣の求心力の淵源として、彼が安史の乱の首謀者、安禄山の仮子であった事実に注目する。そして安史軍系藩鎮における藩帥権力は、唐朝廷の權威だけでなく、安禄山との擬制的血縁関係という、朝廷とは一見相反する側面によっても裏付けられていたことを指摘する。

続く第二章では、李宝臣の死没を契機に起こった「建中の反乱」時の安史軍系藩鎮の行動と乱後の朝廷の対策を分析し、とくに河北の安史軍系藩鎮においては、朝廷も藩鎮側も、モンゴル高原のウイグルに代表される草原世界の動向を踏まえて行動していたことを明らかにする。

また第三章では、河南の安史軍系藩鎮である平盧節度使が、広範な軍事的・経済的活動を展開するために、既存の寺院を拠点として利用し、山地狩猟民や海商との接触・取り込みを図っていたことを導き出す。

以上の検討から、安史軍系藩鎮の視線は、決して朝廷のみに注がれていたわけではなく、草原世界や山地、あるいは海域といった唐朝外部の世界にも向けられていたことを明らかにしている。

そのうえで第四章では、九世紀半ばに昭義節度使で勃発した劉稹の乱に注目し、從来、唐代藩鎮史上の「例外」と見做されてきたこの乱が、安史軍系藩鎮による反乱の系譜に連なるものと位置づけられることを指摘する。続いて、唐朝による劉稹討伐が、北辺におけるウイグルと唐朝との緊張緩和を受けて実現したこと、乱の平定過程で河朔三鎮（河北の安史軍系有力藩鎮）と朝廷との間で世襲や既得権の保持に関する取引が行われたことを解明する。そして最後に、乱の終息は決して唐朝による地

方支配の安定を意味したのではなく、むしろ大量の余剰兵力を放出し、河南を中心とした情勢不安を導いたこと、また内陸草原世界におけるウイグル帝国の崩壊は、唐代藩鎮体制の動搖と密接に関連していたことを指摘する。

そして末尾の終章では、唐代藩鎮体制の展開と破綻が、東部ユーラシア情勢、とりわけ内陸の草原世界の影響を受けていた、と結論している。従来、唐朝衰退の要因は、均田制の崩壊や専売制の弊害など、内的な要素にあると考えられてきた。しかし本論文の成果に基づけば、唐朝の衰亡は、外部のウイグルや半独立の安史軍系藩鎮といった、対抗すべき軍事的脅威の消滅と密接に関連していたとの見通しを得ることができるとする。

【論文審査の結果の要旨】

申請者は、唐後半期の藩鎮問題を検討するにあたり、藩鎮とそれを取り巻く周辺の諸勢力との関係に焦点をあてることにより、これまで研究の前提とされてきた朝廷対藩鎮の二者間関係という枠組みの相対化に努めている。これは、近年の研究における東部ユーラシアという新たな空間設定とも密接に関係するものであり、藩鎮の問題をいわゆる伝統的な中国史の枠組みから解き放つことを意図している。新出文物にいたずらに深入りするのではなく、既知の編纂史料を新しい視点で読み直すやり方と合わせて、申請者の方法の大きな特徴をなすものと言えよう。

これまでにも東部ユーラシア史のなかで藩鎮問題を検討した研究は存在するが、それは主に北方の遊牧勢力との関係を中心に取り込んだものであり、周辺の諸勢力として他の藩鎮との横の関係や、さらには海域世界の海商や南方の山地狩猟民までも広く視野に収めた本論文のような研究は画期的なものである。申請者は、こうした藩鎮周辺の諸勢力と結ばれていた多様な関係を洗い直すことにより、これまで見落とされてきた部分に改めて光をあて、そこから多くの新たな知見を導き出している。

なかでも白眉と思われる点は、これまで藩鎮の反乱として「例外的なもの」として評価してきた劉稹の反乱の本質に迫り、朝廷による反乱の対策やその鎮圧が華北東部、特に河南におけるその後の政治・社会情勢に大きな影響を与えるものであったことを浮き彫りにしたことであろう。これまでの見解を大きく塗り替える知見に満ちているが、とくに①昭義節度使である劉稹の側近集団が、安史軍系藩鎮であった平盧節度使軍団の中核を担った将兵であり、河朔三鎮とも密接な関係にあったこと、②乱の鎮圧とともに大量の余剰兵力が生み出され、そのことが河南を中心とした情勢不安を導いたことは、何れも特筆すべき指摘として挙げられる。

藩鎮体制については、ウイグル帝国や河朔三鎮という軍事的脅威があつて成り立っていた側面があり、九世紀中葉に一様にそれらの脅威が消滅したことが、その体制の動搖に結びついていたという申請者の主張は、必ずしも実証を伴うものではないが、当時の状況を説明するものとして十分に説得力がある。続く唐滅亡後の時代展開を踏まえた、さらなる研究の展開が今後、大いに期待される。

ただし、必ずしも明確には規定されていない東部ユーラシアという空間を申請者がどのように設定しているのか、また朝廷と藩鎮の関係を相対化するとすれば、唐代藩鎮体制の全体像を如何に描いてゆくのか、なお明確に示されてはおらず、今後の大きな検討課題である。細かな部分でも、史料の読みやそれに基づく論証が十分に尽くされていないところが多く残されているが、停滞した感のある藩鎮研究に久々に一石を投じた意欲作として本論文を高く評価できよう。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。